

## オーストラリアでの3年間のSpeed Dating形式英会話クラス実施と検証の報告

奥村 聡  
(ビジネス講師・英語講師)

### 1. はじめに

急速な技術革新による社会の変化に個々が対応していく時代になった。日本人が日本に住む限り日本語を話せばコミュニケーションに困らないはずであったが、それは幻想になりつつある。大手企業が社内公用語を英語にすることを発表し、多くの企業が外国枠を設けてアジア人を積極的に採用、IT革新により世界中の人とライブ動画でいつでも話せるようになり、国内市場に見切りをつけた会社が次々と海外へ進出、アジア各国と日本の交流が日増しに活発になる中、英語学習のあり方も時代に併せて大きく形を変えていかなければならない。1980年代は黒電話を多く見かけたが、いつしかプッシュ式電話になり、コードレスを経てポケベルやPHSが誕生、革新的な携帯電話が登場し、時代と共に多様な機能が開発され、現在スマートフォンという世界中の人々と気軽にコミュニケーションできるミニパソコンのような電話が必須ビジネスツールになっている。そんな時代の変化に対して言語教育は電話と同様に進化しているだろうか。21世紀型スキル(“*The partnerships for 21<sup>st</sup> century skills*”, 2004)に代表されるように、現在、社会において最も必要とされているスキルはコミュニケーション力や異文化共生力である。英語を使用した異文化間コミュニケーション力の向上は早急かつ重要な課題であり、本論文にて述べるコミュニケーション学習に特化したSpeed Dating形式(以下SD式)の英会話クラスは課題への1つの回答になりうると確信している。本論文は、実践的なCommunicative competence向上を重視したSD式の英会話レッスンをオーストラリア・ボンド大学附属語学学校(BUELI)にて3年間(計262回・計712時間・総参加人数4145人)実施した結果を報告。実施データを統計分析した上で、実施効果として、1.英会話への慣れや受け答えの反射、2.英語の運用力向上、3.英会話に対する苦手意識の克服、4.ボディランゲージや話し方を含めた総合的なコミュニケーション力向上、5.異文化理解と他文化・自国文化への興味、6.学習意欲刺激と語学学習目的の明確化の6点において非常に効果的であったことが証明できた。同時に実際に起こった問題とその解決方法から今後の改善点を考察する。学生が世に出て活躍するであろう20年先の日本と世界の姿を論じ、アジアの台頭が確実な中でオンラインSD式英会話の可能性について言及し、今後の語学学習のあり方について考察を述べた。

### 2. 科目英語と言語としての英語

言語習得においてIntrinsic Motivation(内的な欲求)を持たせる事が最重要であることは言うまでも無い(Burden & Williams, 1997. pp123-125)。しかし「純粋に英語が好き。」という学生がどれだけいるだろうか。アルファベットの形状や、英単語の語源、ingの発音、現在進行形と現在完了進行形の違い、不定詞と動名詞の違いに学習意欲を見出す学生がどれだけいるだろうか。実際は、高校入試・大学入試・就職試験・TOEICのように人

生の選択やキャリアアップにテスト科目として英語が課されることで学習意欲を見出しているのが現実である。科目英語は、点数化して比較する必要があるため、自然と正誤がはっきりしている文法や語彙、読解などが中心となり、学生の英語嫌いを加速させる。学生は「良い成績を取りたい」「良い大学に行きたい」などの **Extrinsic Motivation** (外的欲求) によって学習意欲を刺激し、それが学習目的となっている (*ibid.*)。当然、目的達成後は英語力が急落する。従って「科目」英語で優秀な成績を修めていても、英会話が全く出来ない学生も多い。そもそも、言語とは人と人が意思を伝え合うためのものである。おしゃべりを点数化したり、会話に正誤を求めたり、話した文章の構造を見直したり、語彙の多さを競い合うという性格のものではない。**Intrinsic Motivation** を刺激するためには、「ことば」としての英語に興味を持ってもらう必要がある。私たちはおしゃべりを日常的にしている。面白い人や気の合う人、文化の違う人、異性、違う価値観を持っている人達と誰に強制されるでもなく言語を使用して自発的に話をしている。言語を学ぶ目的はコミュニケーションであり、学習意欲は「もっと知りたい」「もっと話したい」「上手く伝えたい」「もっと知って欲しい」という欲求で刺激されるべきである。科目英語が「言語」英語と乖離があるのは、コミュニケーションという概念の欠落が原因ではないかと考察した。

### 3. 英語コミュニケーション経験の不足

小学校からの英語教育が開始されて久しいが、元々日本では中学・高校で3年間、大学でも学部によっては2~4年間と、6~10年英語を学習する。特に中高では受験対策もあり、英語は多くの時間数を費やして授業が行われる。それでも多くの日本人が「英語が話せない」と感じている。ボンド大学附属語学学校 (BUELI) にて20歳~29歳までの日本人40名に「来豪前に英語で15分以上英会話をしたことがあるか」というアンケートを取ったところ、「ある」という回答があったのはわずか22.5%だった。また「英語が話せますか」と言う問いに「はい」と答えたのはわずかに10%だった。実のところ日本人は6~10年も言語学習をしてきたにも関わらず、ちょっとした英会話すら経験が無く、英語を話すことに全く自信を持っていない。スポーツでは「試合」という目的や楽しさがあるから、退屈な練習にも耐えられる。翻って、「話す」という目的や楽しさが無い中で、科目英語を強いているのは、英語離れが加速するのも仕方のないのではないかと。

### 4. コミュニケーションベースの英語学習の必要性

コミュニケーションに特化した英語プログラムが必要なことは言うまでも無いが、NOVA や EAON に代表される「語学学校」がその役割を果たしているとも言い難い。ネイティブの先生と英語で話をするのは通常の会話と異なり、「教わる」という行為になってしまう。言語力に大きな差があり、相手がネイティブ教師で絶対的に正しい立場にある以上、それは通常会話とは異なる。そこには「正誤」があり、「立場」が存在し、他学生と比較した上での「評価」がある。またコミュニケーションである以上、1対1での会話が原則であり、ネイティブ1名に対し3名以上の生徒が話している状態では、効果が薄い。教師にとって「教えない」ことは、難しい (Burden & Williams, 1997)。学生は「英語を話したい」「話す手助けをして欲しい」と思っている、でも、「自分の英語を逐一直して欲しい」とは決して思っていない。

いない。直されることで自信を失うからである。コミュニケーションに正誤を持ち込むのは不自然であり、学生と教師が英語を介して話すよりは、学生同士で話し合う方が望ましい。目の前の相手にどう伝えるのかを考え、情報を共有することが目的である以上、学生同士が1対1で話せる英会話プログラムが必要である。

## 5. アジア人同士の英語コミュニケーション効果

共通項が多ければ多いほど会話は盛り上がる。学生同士の場合、共に英語学習者で年齢が近いことなど多くの共通項が見られる。特にアジア人は共有している文化も多く、芸能人やアニメなどエンターテインメントの分野で多くの共通言語を持つ。3年間のSD式クラス実施中、不思議な事にほとんどのアジア人学生は、アジア人と仲良くなり、アジア人同士で遊んでいた。もちろん会話は常に英語を使用していた。ネイティブよりも、アジア人同士（英語学習者同士）の方がコミュニケーションを取りやすい理由として考えられるのが、文化的距離や言語学習者同士という共通項に加え、英語運用力の低さがあると思われる。使用する単語が限定され、文章も極めて短く、同じ単語を繰り返し使用し、ボディランゲージを多用し、聞き手も文脈を読む努力をするため、**Beginner** レベルであっても長時間のコミュニケーションが可能なのではないか（後述のSD式クラスの項目参照）、と思われる。英語でコミュニケーションが取れるということは、学生にとって非常に楽しいものであることは想像に難くない。英語学習者同士の英語を使用した1対1のコミュニケーションは、学生の学習意欲を刺激し、学習目的を明確化し、英会話の経験を積むには最適ではないかと考え、SD式の英会話を考案した。

## 6. Speed Dating 方式の英会話

英語学習者同士の1対1での英会話クラス（SD式）は、まずクラスを文化圏ごとに大まかな2つのグループに分け、それぞれのグループを整列（列A、列B）させて両列を対面式に座らせ、向かい合う生徒同士でペアを作る。生徒数が奇数になった場合は教師が列に加わる。簡単な表現の導入とアクティビティ説明の後、教師からトピック（例：「food」）1つとトピック質問（例：「What is your favorite food?」）が数問出される。対面している学生同士は挨拶をし、トピック質問から始めるが、基本的に英語であれば何を話してもよい。学生には「会話の中でできるだけ多く共通点を見つけ、おもしろい情報を引き出すように」と伝えておく。5~10分後、私の「Rotation」の掛け声と共に片方の列（列B）全員が席を1つずつ横滑りに移動し、対面の相手が違う学生になったところで、同じトピック質問での会話を行う。1つのトピックに対して最低3回以上「Rotation」させる。この方式だと2時間半のクラスで学生1人当たり約15人~20人程度の学生と英語で会話することになる。学生は150分もの間、ひたすら英語で話通しになる。教師はアクティビティ説明、会話時間の管理、トピック提示、質問の受付、問題のあるペアへの対応、全体の雰囲気統括など、司会者のような役割をこなす。会話中は電子辞書の使用、教師への質問は原則禁止だが、話し相手に了承を得た上であれば可とした。尚、英語レベルの差は一切考慮せず、SD式授業で使用する教材はできるだけコミュニケーションの取りやすい簡単なアクティビティを準備した（1クラス当たり、5教材程度）。

## 6.1 アクティビティ

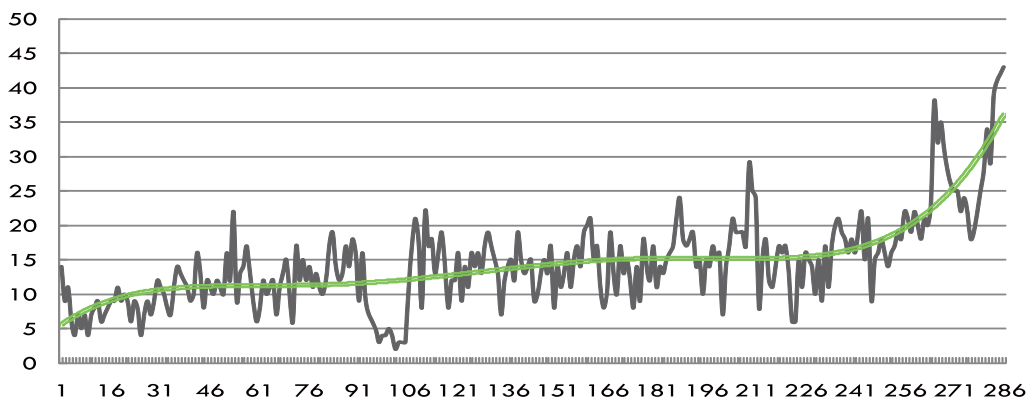
1 クラス 2 時間半で 3~7 つの教材を準備した。基本的にはトピックベースでカリキュラムを組んだため、173 トピックとトピック質問 (10 問) を用意。他にも会話を刺激する多様なアクティビティを考案した。以下はその一例である。1) 「Me, too!」ペア間でなるべく多くの「Me, too!」を見つけさせ、他ペアと競う。2) 「Mind reading」例えば「行きたい場所」を 4 箇所リスト化させる、ただし 4 つの内 1 つは「行きたくない場所」を含める。5 分間、お互い質問し合って、どれがウソなのか推測させ、制限時間後に答えあわせを行う。3) 「Voting」グループを男女に分け、異性同士のペアで、1 人 5~10 分かけて全異性と話をしたあと、「1 番話やすかった人」「1 番おもしろかった人」等を匿名にて投票を行う。4) 「Iron chef」素材カード (野菜、果物、穀物等) を各ペアに 4 枚ずつ配り、さらにスペシャルカード (ワニ、納豆、ベジマイト等) を 1 枚ずつ配り、制限時間以内にペアで料理を作らせ発表させる。5) 「Tour agent」自分の国に相手を招待するという設定で、相手の趣向に合わせたツアーを組ませる。6) 「Improvisation」ランダムに名詞を 3 つ配り、その名詞 3 つをストーリーとして繋げて話をさせる。考える時間は与えず、とにかく話しながら、めちゃくちゃでも繋げて話をさせる。7) 「Role play」職業カードを 1 人 1 枚配り、ペアごとに場所カードを配る。例えば「主婦」と「美容師」が「病院」で出会った、という組み合わせができる。その組み合わせを元に「なぜ？」を聞きながら、会話をしていく。8) 「Sales」雑貨箱から 1 つ商品を選んで、相手にその商品の良さアピールし、販売する。

## 7. オーストラリア・ボンド大学での取り組み

オーストラリア・クイーンズランド州ロビーナ地区に在るボンド大学・大学附属語学学校 (BUELI) にて上記の Speed Dating 方式の英会話クラスを実施。クラスの概要は 1) 1 クラス 2 時間 30 分、2) 学生は通常授業 (8:30-15:00) 後に自由参加、授業料は無料、3) 週 2 回、時期によって週 3 回、4) 学生のレベルは GE level 1 (Beginner) から EAP3 (English for Academic Purpose: Advanced) まで様々、5) 国籍は日本人・韓国人・台湾人で 7 割以上を占めるが、10 カ国以上から参加、6) 年齢は全員 18 歳以上 (平均は 20 歳代半ば)、7) 語学学校は、毎週生徒が入れ替わるため、学生数は日によって大きく異なる。最少 2 名、最大 43 名。また毎回、新入生が入ってくるため、積み上げ式カリキュラムは困難。予約制では無いので学生数の事前把握は不可、8) 教材とカリキュラムは独自に開発、9) クラスの主任教師は日本人であり、ネイティブではない。10) 当初は 4 回のみの予定だったが、要望により継続し、最終的には 262 回 (3 年間) 開催。開始半年後には、英会話クラスでの実績や効果が BUELI や同大学院に認められ、大学・大学院で TESOL を専攻する学生のインターン科目に組み込まれる (3 年後の SD 式クラス終了時まで)。

## 8. 実施統計と分析

SD 式英会話クラスの実施回数は 262 回。それ以前の SD 式では無い英会話クラスは 24 回実施。総授業時間、712 時間。総期間、36 ヶ月。総参加生徒数、4145 名 (重複あり)。1 クラス平均生徒数 14.49 名。平均教師数 1.95 名。最大生徒数 43 名。最少生徒数 2 名。男女比は 44 対 56。以下のグラフは生徒数の推移である。



(グラフ1：SD式クラス生徒数の推移)

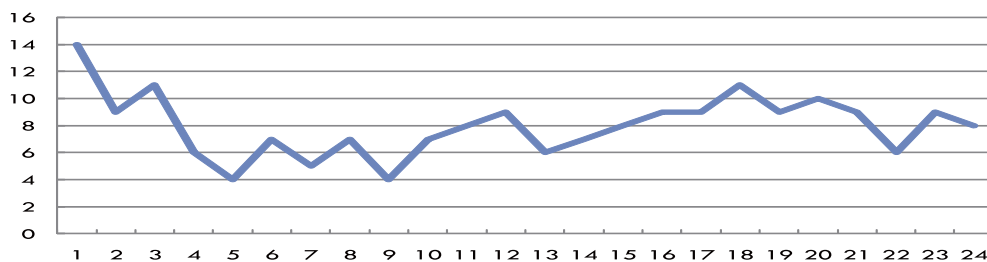
生徒数は激しく上下しながらも、伸びているのがわかる。毎週生徒が卒業し入学するため、時期の影響を受けやすく、波のあるグラフになった。クラスが通常授業（8:30~15:00）後の2時間半という長時間であったことや、自由参加であったこと、クラスを口コミに依存していたことなども、生徒数が安定しなかった要因と考えられる。教室のサイズは順調に大きい教室に移っており、参加生徒数も開始当初の10倍以上に増加、最終的には定員超の43名が参加した。生徒数の観点からSD式英会話は学生のニーズを満たし、効果が高いことを証明したと言える。男女比は44対56で女性が多いが、BUELIは元々女性が多く、性別による有意差は見られない。しかし男女別のグラフで分析すると女性はグラフの波が激しく、男性は比較的なだらかであった。女性は1人で参加するより、仲間と集団で参加する傾向が見られ、短期滞在者が多いように思われる。一方、男性には長期留学者が多く、1人でも継続して参加する傾向が強いことが要因と思われる。またクラス内性別比で男女どちらかが8割を越えると、もう一方の性別がクラスに入りづらくなるという現象も見られた。生徒の国別比率は、日本人40.1%、韓国人30.5%、台湾人13.8%、アラブ系7.0%、その他8.6%と日本人・韓国人で7割以上を占めている。この結果は実施当時のBUELI国別学生比率に近い数値であり、国別による大きな有意差は認められなかった。日本人は特に激しい波を示したが、日本人は比較的集団で参加する傾向が強いことと、春季・夏季等の休暇に急激に人数が増えることから、上下動の激しいグラフになったと推測される。開始当初は日本人が教師ということで、白人のネイティヴを希望する日本人からは避けられていたが、少しずつ受け入れられ、最終的には多くの日本人から支持を得た。

## 9. Speed Dating 式クラスの経過と考察

SD式英会話は3年間に渡る実施と運営の中で改善を繰り返し醸成した教授法である。クラス運営をしていく中で多くの問題に直面し、その都度解決策を探って対策を立て、また新しいアイデアを積極的に取り込んで試みを繰り返し、時に失敗を生むケースもあったが逆に新しい方法が思わぬ効果を上げることもあった。トライアルも含め286回のクラス運営を全9期に分け、各時期に直面した問題とそれに対する解決策の報告、さらに改善のための試みの実施を記載する共に、各時期別クラスの傾向と状況を考察した。

### 9.1 トライアル 2005年5月~8月

SD式英会話は当初「Cross-cultural Communication Club」という名前で開始された。当初は異文化交流の意味合いが強く「アジアの学生と接する機会の少ない現地のネイティブ大学生との異文化交流機会」として開催し、目的は学生の英語コミュニケーション能力向上と大学生の異文化コミュニケーション力向上であった。経営学科に籍を置くオーストラリア人とアメリカ人4名（男性2名、女性2名）、それに日本人を加えた計5名で、計4回（週2回×2）90分の補講を行った。基本は個別指導で、教師1名に対して、学生2、3名が付く。一応トピックはあるが、内容は各グループに一任。一般的な話に終始するグループもあれば、質問形式で学生が授業でわからなかったところを教えるグループもあった。しかしこの企画は大失敗に終わる。第1回は宣伝の効果もあり14名の参加があったが、第4回には4名にまで減少。学生からの不満や要望をヒアリングしたところ、以下の7点が挙げられた。1) 90分も話が持たない。最初の10分程度は頑張れるが、細かい話になるときつい。共通点も少ないし、話題も見つからない。2) 英語の上手い学生ばかり話をして、自分にはあまり話すチャンスが無かった。先生も英語の上手い学生とばかり話すし、つまらなかった。3) ネイティブと話していると、どうしても聞き役に回ってしまう。聞くより話したい。4) 英語を直されると、自信を失くす。もっとコミュニケーションがしたい。5) 相手が何を話しているのかわからなくても、相手の話を止めてまで質問できない。6) 先生によって差があった。同じアクティビティばかりで飽きた。7) 盛り上らなかった。できれば他の先生や他の生徒とも話したかった。上記の意見を受け、クラスの大幅な変更に着手。クラス名を「Satoshi's Conversation Class」と変更。学生からの要望を受け、以下8点を改善した。1) ネイティブであっても、学生の話が聞けない人や伝える努力をしない人は加えない。2) 会話機会を平等にするため、基本はペアワーク。3) Reading、Writingは一切やらない。またGrammarとPronunciationも極力除外。会話に集中させるため、机を退かし、椅子のみにする。4) ペアでできるアクティビティや話しやすい一般的なトピック質問を多く用意。5) ペアは短時間ごとにシャッフル。6) クラス教師は日本人1名とし、クラス内のアクティビティやカリキュラムはすべて主任教師が決める。7) 学生の間違いは直さない。アクティビティ等の指示はするが、基本的には「教えない」。8) 授業の最初に今日使って欲しい表現を3つだけ導入。これら改善策を基に、放課後90分のクラスを計20回（週2回×10）開催した。以下のグラフがトライアル期の生徒数推移である。



(グラフ2: トライアル期の学生数推移)

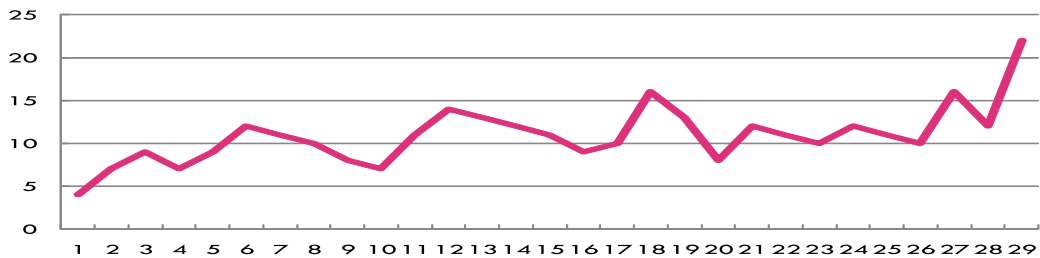
グラフ2を参照すると、一度4名まで落ち込んだ学生数が、徐々に持ち直しているのが

見て取れる。第8回からは学生の希望で授業時間を120分に延長。これ以降、英会話クラスは120分となる。20回のクラスを終えて、学生から継続して欲しいという多数の要望と、継続にあたっての改善点が聞かれた。意見は以下3点に大別。1) 英語を話すなら、英語文化圏の白人がいい。海外まで来て日本人に教わりたくない。2) レベルの低い子に合わせて話すのは苦痛。アジア人と話していたら発音が下手になる。3) 文法や単語、発音など学べる部分が少ない。テスト等の結果に現れないから、効果があるかどうか疑問。これらの意見はコミュニケーションに特化したSD式クラスの主旨と大きくずれているため、黙殺した。また継続を希望する学生の意見は大別すると以下5点であった。1) 120分も継続して英語を話したのは初めて。自分がこんなに英語を話せるなんて思わなかった。2) 多くの人と話ができて、色んな価値観や文化を知れて良かった。3) 友達ができた。案外英語が通じた。クラスが終わった後も話し込んだ。もっと友達を作りたい。4) 母国語でもこんなに話さない。コミュニケーションの勉強になった。5) 発音や文法を気にせず、楽しく話ができて、盛り上った。英会話に自信がついた。これらの意見はクラス目標であった「コミュニケーション力向上」「学習意欲の刺激」「英語への自信」を達成した証明である。一度クラスに来た学生のリピート率は非常に高く、クラスが学生のニーズに合っていることが確認できた。留学生は案外、英会話機会が少ない。ホームステイは、挨拶程度の会話しかしない所も多く、しかもネイティブ相手に長話は難しい。バスに乗る、買い物をする、といった日常生活で使う英語も表現が限られている以上、留学生にとって最も英会話機会が期待できるのは学校である。しかし学校では試験のために、文法・読み・書き・発音などを教える必要があるため、留学しているにも関わらず、英語で会話をする機会が無い。そういう背景もあって、計20回の会話クラスが盛況の内に終われたと分析できる。

## 9.2 第一期 2005年9月~12月

4か月のトライアルを経て、Speed Dating 式英会話を開始。当時のBUELI 校長 Neil Roberts 氏により教授法を Speed Dating method、クラスを Conversation class と名付けられた。トライアル期の参加者が1人残らず卒業したため、第1回は新入生4名でのスタートとなった。SD式の特徴としてペアが次々入れ替わる「Rotation」があるが、4名では「なるべく多くの人と短時間で話をする」ことは難しかった。しかしSD式のスタイルは崩さず、あくまでも短時間での Rotation を繰り返し、一度話したペアになっても、トピックを変更し続けた。しかしSD式は効果的であったようで、開始5回目にして参加者は10名を越えた。その後、学生数はコンスタントに10名前後を記録。最終的には20名を越えた。学生数が20名を越えた段階で、2つの発見があった。ひとつはクラスルームマネジメントの難しさである。第29回目には22名が参加したが、ペア間の距離が近すぎて、みな大声で話をしなければならず、個々が何を話しているのか全く把握できなかった。しかし、騒がしさが「話しやすい空気」をもたらした結果的にペア間の会話が大いに盛り上ったという効果もあった。個々の会話を把握するためペアで何を話したのか発表してもらったが、11ペアもあるため大変なタイムロスとなった。学生にとって発表者しか話さないクラス発表は退屈なのか、空気がたるんでしまった。せっかく楽しく話している状態をクラス発表で止めてしまうことは、失敗であった。もう1つの発見はクラスサイズである。

最大 12 名の教室に 22 名が参加したため、机をすべて移動し、椅子のみを並べてクラスを行なった。空気が薄くなったと感じるほどにすし詰め状態になったが、机が無いことでペア間の距離が近くなり、学生がより話しやすい状態になった。もちろんノートや辞書を置くスペースも無いので、目の前にいる相手との会話に集中できているようだった。この 2 つの発見から SD 式クラスでは「クラス全体の発表やクラス全体での質問受付はやらない」「ペアとペアの距離はなるべく近くする」「原則、椅子だけを並べて行う」とした。



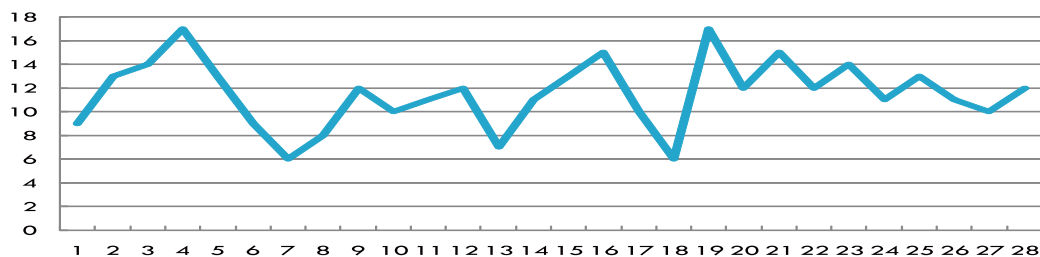
(グラフ 3: 第一期の学生数推移)

### 9.3 第二期 2006年1月~4月

第二期は前回の評判もあり、第 5 回まで定員越えのスタートを切ったが、グラフ 4 に見られるように第 6 回以降に急落した。人数が増えたことで個々の会話への配慮が行き届かなくなり、異文化学生間の諍いへの対応が遅れ、諍いを起こした学生達がクラスに来なくなったことが一要因だ。主に以下 4 点が諍いの理由である。1) 性的な表現：特に男子生徒から女子生徒に対し不適切な表現があった。異文化間で性的な表現の許容範囲が違うため、一方はジョークのつもりで話をしていても、一方は性的な侮蔑にとってしまう。性的話にオープンな学生もいれば、極端に奥手の学生もいる。恋愛や性に関する話題は文化の壁を越えて盛り上がるができる、おしゃべりには必要不可欠なものであると同時に、繊細でもある。少なくとも直接的な性的表現の使用は控えさせるべきで、そのように指導すべきだった。2) 宗教や歴史：アラブ人学生と韓国学生の間で起こったトラブルだが、イスラム教の習慣に関して韓国人が多く質問をした。断食やお祈りなど、非常に興味深い会話をしていて、韓国人学生はキリスト教徒であり、途中から相手の話に対して反論をするようになった。最終的には自分の宗教の方が正しいという話を始め、口論に発展した。別のケースでは韓国人学生と日本人学生が、観光地の話をしていて、そこから歴史の話に発展。感情的になった生徒が「日本人は歴史を知り、謝罪すべきだ」と詰め寄り、日本人学生は途中退席してしまった。歴史や宗教に関する話題は繊細で、意見の押し付けや考えの拒否、尊敬の無い反論はただの口論でしかなかった。3) 個人的感情：好き嫌いがあるのは仕方がないが、ペアワークで露骨にそれを出しているケースが見られた。生理的に受け入れられない相手だとしても、態度に出せばトラブルになる。韓国人女性が男子生徒に対し「気持ち悪い」と言い、無視をしたことが原因で、双方ともクラスに来なくなってしまった。英語以前の問題である。「相手の気持ちを考える」ことが出来ない学生への対応が課題となった。4) Fワード：初期の英語習得者によく見られるが、好んでスラング (Fワード) を使いたがる。ネイティブの話すカジュアル英語の真似なのだろうが、Fワード



の使用は、相手を不愉快な気持ちにさせ、相手に話す気持ちを無くさせる。Fワードを始めとした、侮蔑言葉にあたる表現は、当然使用禁止にした。以上を踏まえ「相手の気持ちを考え、気持ちよく会話を楽しむため」のルール(9 don't)を学生との話し合いで作成。以下がそのルールである。Nine don't: 1) Don't use F word. 2) Don't use sexual expressions. 3) Don't push. 4) Don't argue. 5) Don't reject. 6) Don't escalate. 7) Don't react. 8) Don't be silent. 9) Don't use of first language. 以上9つのルールは毎回クラス開始前に確認し、それでもルールを守れない生徒は勧告後、強制退室とした。このルールを徹底した結果、学生間のトラブルはほとんど無くなった。また Suggestopedia (Richards & Rogers, 2001) を応用し、より話しやすい環境を創造した。カフェテリア式と名づけ、試験的に以下の環境変更を実施。1) クラス中は音楽をかけっぱなしにする。本来はクラシックが良いが、英語のクラスなので、最新の洋楽 POP を選択。2) クラスに資料を置く。元々クラス内には世界地図や各国の文化紹介等があったが、それに加えて、日本・台湾・韓国の地図を用意。さらに英語の料理本や雑誌なども持ち込んだ。3) 2時間以上も話通しになるので、飲み物を用意。さらに話題のネタにもなるので、お菓子も用意。4) 文房具や雑貨を用意。紙やペンはもちろん、各種色ペンや折り紙、剣玉やブーメランなどを用意した。目指した形は「カフェテリア」であり、より自然に会話が発生する形を目指した。カフェテリア式を導入してからの学生の評判は非常に高く、生徒数は定員数の14.5名をコンスタントに推移。特に1)の音楽は、非常に効果が高く、その後の Conversation class に欠かせないものとなった。また一般クラスでも音楽を流すアイデアは採用された。従来は会話を止める際に大声を出していたが、音楽を使用することによって、オンとオフで学生のアテンションを切り替えられるようになった。2) 各国の地図を置いたことは、異文化コミュニケーションにおいて大きな補助になった。自分の出身地の話をすることが多いため、アジア各国の地図は、その後も常に使用した。3) 飲み物は評判が良かったが、お菓子は「食べながら話をするのは失礼」「教室が汚れる」「金銭的に負担がかかる」などの理由で直ぐに中止となった。飲み物も各自持参になった。4) 会話補助として文房具や雑貨は大いに活用できた。特に紙を介してのコミュニケーションは頻繁に行われ、紙とペンは学生間のコミュニケーションに必要不可欠な道具になった。

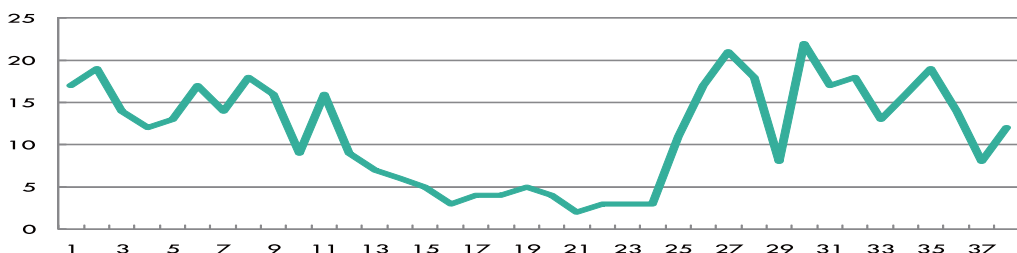


(グラフ4: 第二期の学生数推移)

#### 9.4 第三期 2006年5月~8月

第三期に入り20人で安定していた生徒数が、2~4人に急落した。特に第9回から第24回が顕著だが、この期間はインターンの受け入れをしていた。第三期開始直後、今までの

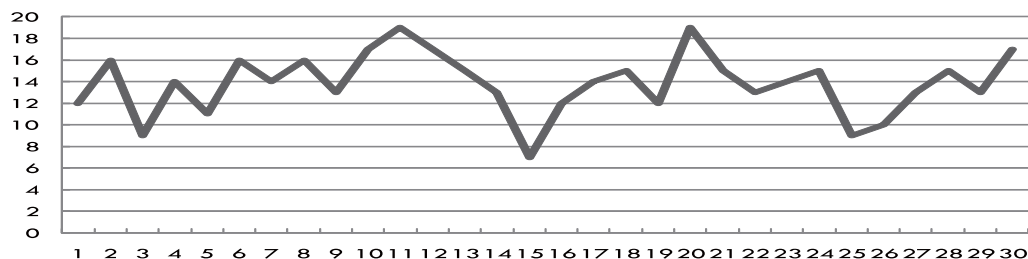
取り組みが大学院に評価され、「Language Teaching Internship」（単位科目）の一部として TESOL を専攻する大学生や大学院生が参加することとなった。インターンはネイティブと教師経験者ばかりで構成され、授業ごとにレポートを提出しなければならなかった。「教えないで会話をさせる」SD 式がインターンに十分理解されないまま開催され、毎クラス 3 人～5 人のインターンを受け入れたが、学生からの評価は最低であった。以下は意見の一部である。「先生が話をしてばかり」「盛り上っている会話を止めてまで教えて欲しくない」「文法や表現の正誤を指摘しないでほしい」「空気を読んでほしい」「偉そうだし、上からモノを言う」「対等に話がしたいのに先生ぶる」「いちいち直される」「楽しく話をしようという意思を感じない」「言うことを理解してくれない」「自信を無くした」「話づらい」。英語教師経験者が多数のインターンだったが、彼らは致命的にコミュニケーション力が欠如していた。「英語を教えること」と「英語でコミュニケーションをとること」は全く違う。学生は英語を使って話す経験を積みたいのであって、正誤を教えてほしいわけではない。しかし教師にとって学生から求めてくるまで「教えない」ということは大変難しい。基本的に各インターンに会話の内容は一任していたが、勝手にゲームやドリルをやらせようとする教師や、学生と諍いをおこす教師も出てきたため、学生数が 2 名まで落ちた際に大学院側と話し合い、インターン受け入れを一時的に取りやめた。第四期からは問題なくインターンを受け入れる体制にするため、以下の対策を立てた。1) SD 式のコンセプトを理解してもらうため 30 分のインターン向け説明会を開催。2) SD 式に合った盛り上がるトピック質問をインターンに考えてきてもらう。3) 7 つのルールを作成：一方的に話をしない、要望も無いのに教えない、学生に話をさせる、主任教師の指導に従う、学生に混ざって文化交流やコミュニケーションを楽しむ、学生に合わせた英語レベルで話す、学生から質問があったら「わかるまで」指導する。この対策開始後は、インターンを受け入れても第三期のような大幅な人数減は見られなくなった。インターン受け入れを一時的に取りやめた第三期後半には、再び 20 名以上の学生が参加する状態に戻った。この時期は夏季休暇と重なり学生数が増加したことや学生からの評判が非常に高かったこともあり、要望を受けてクラスを週 2 回から週 3 回へ変更した。「できれば毎日やってほしい」「いつもクラスが一杯で入れない」「クラスで習った事をすぐに使いたい」「通常授業に組み込んで欲しい」「英会話をできるのはこのクラスだけ」など肯定的な意見が聞かれた。週 3 回へ変更すると同時に、授業時間も 120 分から 150 分に変更した。生徒からの評判は良かったが、150 分の授業を週 3 回となると、教師への負担が重く、結果週 2 回へ戻した。しかし金曜の放課後に BUELI ネイティブ講師による会話クラスを新たに設け、学生にとっては週 3 回の英会話クラスは維持された。



(グラフ 5：第三期の学生数推移)

## 9.5 第四期 2006年9月~12月

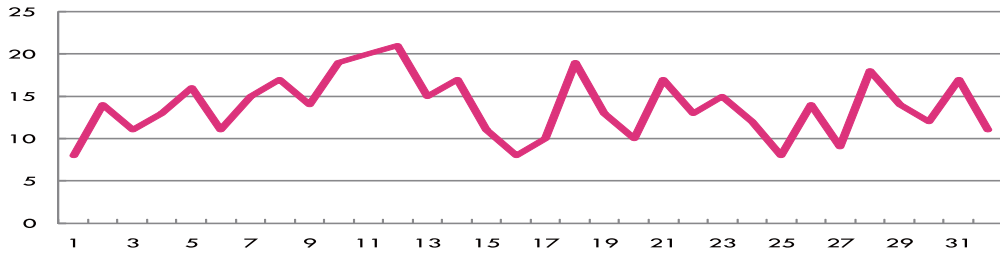
開始1年を経て第四期に入ると、教授法も確立され人数も安定してきた。この時期の特徴として、長期留学者（現地大学進学を目指す学生）の参加が多かったことが上げられる。普段は英語能力試験対策の学習しかしていないため、英語学習に対する倦怠感があったように感じた。彼らにとって気軽な異文化との触れ合いは、良い気分転換になったと共に、スピーキング力の飛躍的な向上につながった。難易度の高い英語にばかり触れて視野が狭くなっていた彼らにとって、自分と同等、もしくは自分より低いレベルの学生と会話をすることは、「どうすれば上手く伝えられるか」「どういう表現がわかりやすいか」「自分の英語はどう映るのか」などの点で、非常に参考になったようだった。この時期、学生がSD式会話で「英語を話す重要なポイント」として9つの単語をクラスに張り出してくれた。Simple「シンプルに」、Short「短く」、Slow「ゆっくり」、Smile「笑顔で」、Confidence「自信を持って」、Clear「はっきりと」、See「相手を良く見て」、Sensitive「相手の気持ちを察して」、Communicate「会話をする」。また学生からのアイデアで台本を使用したドラマ法を実施したが、決まりきった台詞を覚えるより、自分たちで考えて会話をしたい、覚えた単語を使いたい、英語会話機会が減ってしまうという理由から、1回限りで止めた。



(グラフ6：第四期の学生数推移)

## 9.6 第五期 2007年1月~4月

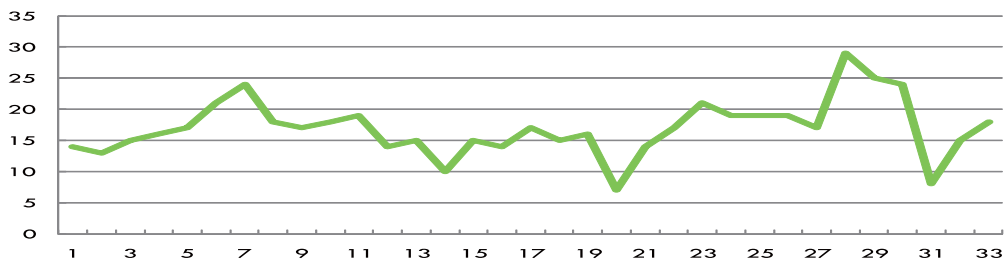
この時期は人種バランスに関する取り組みと、三人教師制度を実施した。まず人種バランスに関する取り組みだが、第7回から急激に韓国人が増え始め、クラスの50%以上が韓国人になってしまった。クラスによっては75%韓国人が占める日もあり、同人種でのペアワークが多くなってしまった。さらに以下の問題も発生した。1) 台湾系・アラブ系が来なくなった。2) 韓国人仲良しグループが出来てしまい、新規の子が入りづらくなってしまった。3) モノカルチャー化し、会話の幅が狭くなった。4) 韓国人ペアの時は、韓国語が聞かれるようになった。対策として第14回以降は、1人種で50%を超えないように人数制限を設けた。その結果、再び人数がコンスタントに20名を記録(グラフ7参照)するようになった。また学生数増加に伴い三人教師制を導入。BUELIで1番大きい教室に移動し、主任教師とは別に二人のインターンが、3ペアか4ペアを観察しつつ、会話に加わる形をとった。各ペアを小グループで把握し、質問しやすい環境を採り、教師も席替えする仕組みにした。教師にとっても学生を理解する良い機会になり、学生からも評価が高かった。三人教師制を長期間経験したインターンには後にSD式クラスを委任した。



(グラフ 7: 第五期の学生数推移)

### 9.7 第六期 2007年5月~8月

夏季休暇と重なったこともあり、学生数が 20 名を遥かに越えて 30 名を記録した。この時期は「クラスの外へ」というテーマで運営した。クラスに入りきれない人数になり、青空クラスを開始。せっかく英語圏にいるのにクラスにはもったいない、という考えの下、1) 学校近くのカフェテリアで 1 ドリンク制クラスを開催。2) 学校内の BBQ スペースを借りて、色んな国の食事をしながらクラスを開催。3) 公園でクラスを開催、などの青空クラスを行った。また週末に異文化交流スポーツイベントを開催し、サッカーやバスケットボールを通じてコミュニケーションを図る機会を設けた。特にスポーツイベントは好評で、スポーツ好きの学生たちの中で自主的に毎週続けられた。クラス時間だけではなく、クラス外でも英語を話す環境を提供することも重要なことであり、SD 式クラスが英会話のきっかけであることを再認識した。

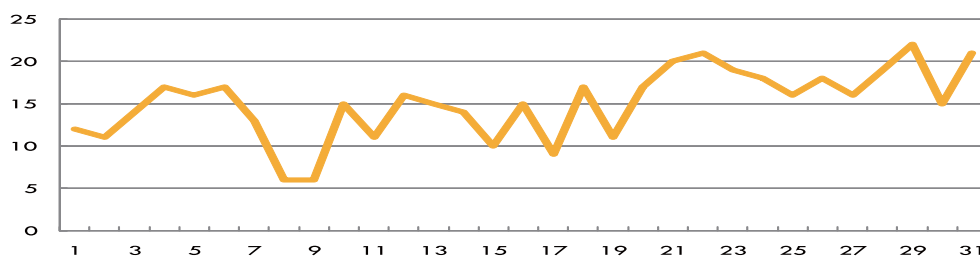


(グラフ 8: 第六期の学生数推移)

### 9.8 第七期 2007年9月~12月

SD 式クラスも 2 年を越えて BUELI に浸透した中で、第七期は急激な落ち込みに見舞われた。きっかけはインターンが SD 式クラスで知り合った生徒と付き合いだしたことに始まる。毎回ペアで 150 分話し続けるため、学生同士や教師と生徒は仲良くなりやすい。実際、交際関係に発展する学生ペアも何組か見られた。もちろん参加者全員 18 歳以上なので、自己責任ではある。しかしこのインターンの場合、教師でありながら、学生と付き合い、短期間で別れ、直後に別の学生と付き合い直ぐに別れた。このインターンと付き合いしたのは 2 人とも韓国人女性であり、この事件をきっかけに韓国人が一切クラスに参加しなくなった。女性生徒数も激減した。学校や学生への説明責任も生じた。対策として、インターンへの注意と勧告を行い、当該インターンはクラスへの参加を認めず、さらに学校へ責任範囲の明確な説明を行った。本事件はクラス内の問題ではなく、クラス外での事柄

ではあるが、それによってクラスが不利益を被ったのは事実であり、これ以降インターンと学生へ、責任範囲について記載した書面を渡し、説明するようにした。またこの時期は急激にインターンが増えた時期でもあり、毎時間5名～8名のインターンが来た。情報の共有が必要なため、毎時間授業前に15分ほどミーティングを行い、アクティビティや授業の流れを確認、学生からのフィードバックを共有した。インターンからのアイデアや教材も取り入れると同時に、「教えない」の徹底やクラス目的の再確認等をした。



(グラフ9：第七期の学生数推移)

### 9.9 第八期 2008年1月～5月

SD式クラスも200回を越え、3年が経過し、一定以上の成果を確認できたので、第八期で終了することを決定。この時期はアラブ系や台湾人が増え、ヨーロッパ系やネイティブも参加が見られ、多様な文化背景を持つ学生が一同に介する会話クラスとなり、参加すれば世界中に仲間ができるような様子であった。学生数は40名近くを記録し、最終的には43名が参加。クラスサイズを考えれば驚異的な数字である。最後の10回、急激に数字が伸びた理由として「後10回で終わります」というアナウンスで駆け込み参加が増えたことが考えられる。クラスに詰め込みすぎて、気持ちが悪くなる生徒が出たが、第八期は特に目立った問題も無く、SD式が学生に受け入れられた形で無事に3年間のSD式クラスは終了を迎えた。主任教師が学校を去った後も、学生からの要望でSD式クラスはインターンでSD式を経験した先生やBUELIの先生を中心に継続された。また学生間で自主的に集まってクラスを開催したとの報告も受けた。学生によるクラスは「Conversation Club」と名を変え、参加者が放課後に図書館やカフェに集まり、会話を楽しむ形式を採っていたが、1年半前に運営者がいなくなり解散した。SD式クラスの卒業生が母国の大学へ帰って、SD式のクラスを立ち上げた、という報告もあった。



(グラフ10：第八期の学生数推移)

## 10. Speed Dating 式の効果

3年間の運営実績から、SD 式英会話は学生の英語学習に対する学習意欲向上と学習目的の明確化に高い効果があり、文化学習やコミュニケーション力向上に大きな効果があることを示した。丸1日英語を勉強して疲れ切った後に、参加義務のない150分の英会話クラスに教室が一杯になるだけの生徒が参加し続けた実績は、学習者のニーズを十分に満たしていたと言える。学生からのフィードバックも回を進めるごとに肯定的な意見になり、「一般英語のクラスより、たくさん話せて楽しかった。文化の話が刺激になって、英語の上達が早かった。自分が上手くなっている実感があった。」、「椅子に座って話を聞いて、ドリルや穴埋めをするクラスより、SD 式クラスで友達を作って、150分英語をたくさんの人と話す方が絶対に英語がうまくなる。」、「英語に慣れたことで、英語が怖くなくなった。」などの意見が聞かれた。当初の目的である「コミュニケーションに特化したクラスで、学習意欲を刺激し、コミュニケーション力と異文化理解力を向上させ、自信を持って英語を運用できるようにする」は達成できたと言える。

## 11. Speed Dating 式英会話の日本での可能性

日本に帰国後、国際ことば学院外国語専門学校にてSD 式英会話クラスを実施。同専門学校は東南アジアの学生を中心に多くの留学生を受け入れており、SD 式実施には最適の環境であった。同校で1年半英語講師を勤めていた間、通常クラスにSD 式クラスを組み合わせる方式を採った。8カ国約20人の生徒に90分クラスを指導。前半45分は文法や構文の指導をして、残り45分はSD 式クラスを実施した。結果、SD 式は学生からの評判は良かったが、文法テストや読み書きの試験結果には繋がらなかった。就職を考えてTOEICを受ける学生や、試験を受けて大学への編入を考えている学生もいたので、結果的に直接試験の結果に繋がりにくいSD 式の時間は短くなっていった。コミュニケーション力や異文化理解力が英語課目の中で点数化されない事柄である以上、試験勉強が必要とされる科目英語にSD 式を取り入れるのは難しいだろう。ことば学院以外に、静岡で社会人向けSD 式英会話クラスを10回に渡って実施。参加者が全員日本人だったので、本来SD 式で期待される文化交流は皆無であった。日本人同士でもコミュニケーションは非常に盛り上がったが、困ると日本語が出てしまうこともあった。また異文化同士であればこそ盛り上げるトピックが多かったため、会話が広がらなかった。さらに英会話の上手い下手が話の主導権に大きく影響するので、会話に自信が無い生徒が萎縮してしまう傾向もあった。やはり異文化同士であることは必須条件であり、日本人のみのクラスでは「英語を話すのは楽しい」だけで終わってしまい、本来のSD 式に比べて効果が薄いことが分かった。

## 12. オンラインSD 式英会話

日本に居ながらSD 式英会話を実施するにあたり、スカイプ等のライブ動画を用いての2カ国間での会話を考案した。(株) UNHOOP (オンライン英会話事業) にシステム開発と管理を依頼し、両国の当該クラスにあるパソコン同士(一人一台)を繋ぎ、1対1ペアを作る。人数や時差、パスワード管理等の問題があるが、教材やプランは当方で用意し、システムも簡易なので教師にとっての時間的・知識的負担はないようにした。学生にとって、パソ

コン画面に現れた異文化の学生と会話をするのは財産になる。2~3分でペア交代するので、学生は30分で約10名の外国人と英語で話をするようになる。ネット環境やパソコン台数の問題もあるが、今後確実に改善されていく領域なので将来的に期待できる方式である。むしろSD式英会話の入る隙間がカリキュラムに無いことがハードルである。トライアルをしてくれる学校を探し、実施実績を重ねていくことが必須だろう。今後の英語教育、特にコミュニケーション学習や文化学習に於いてオンラインSD式英会話が大きな役割を果たすと確信している。

### 13. アジアと日本

ゴールマンサックス証券2007年経済予測レポート(2007)によると、2050年GDP成長率予測第一位はベトナムである。2位以下は、インド、ナイジェリア、中国、エジプト、フィリピン、バングラディッシュ、インドネシア、パキスタンと続く。TOP9カ国の内7カ国がアジアの国々である。NEXT11と呼ばれる国々も11か国中7カ国がアジアの国々である。そんな中、日本は将来的にも経済成長が見込めない状態であり、少子高齢化で人口の低下も予測される。政府はアジアの若い力を日本に注入すべく留学生受け入れ30万人計画を発表した(日本学生支援機構, 2008)。そういった政府の思惑とは反対に、日本の若者は「内向き傾向」が強く、留学生は減少し、海外勤務を希望する若手社員も減少しているため、国際競争力が一層低下する可能性が高い(山本、岩城, 2011)。反対にアジア諸国は軒並み海外留学が増加し、特に日本への留学生の伸びは目を見張るものがある。日本の場合、留学も大半が欧米への留学であり、アメリカ・カナダ・イギリス・オーストラリア・ニュージーランドの英語圏5カ国で60%以上を占める(日本学生支援機構, 2008)。アジアへの留学は2割程度であり、未だに欧米英語圏への神話を捨ててきていない日本人の姿が浮き彫りになった。今やアジア人同士でもコミュニケーションは英語で行う時代である。いまだにイギリス英語やアメリカ英語に拘り、文法の正誤、発音の得手不得手等を気にする姿は時代遅れである。コミュニケーション力や異文化理解力、英会話への自信が無ければ、ネイティブはおろかアジア人とのコミュニケーションですらままならないだろう。オンラインSD式英会話は、アジア人同士が共にコミュニケーション力を養い、お互いが英語という共通言語を介して文化を理解しあい、アジア人同士が助け合うためのきっかけになりうると考えられる。

### 14. まとめ

実践的なCommunicative competence向上を重視したSpeed Dating形式の英会話クラスをオーストラリア・ボンド大学付属語学学校(BUELI)にて3年間(計262回)実施した結果、英会話への慣れや反射、英語の運用力向上、苦手意識の克服、コミュニケーション力向上、異文化理解と文化への興味、学習意欲の刺激や学習目的の明確化において効果が高いことが証明された。言語の点数化が必要とされる科目英語が、話し相手を見ずに正誤ばかりを気にする、英会話が苦手な日本人を生み出している現状において、異文化と触れ合う中でコミュニケーション力を磨き、英語を使う楽しみを感じられるSpeed Dating式英会話は、今後大きな成果を上げる事が期待できる。英語で異文化の人々とコミュニケーションを図れる人材育成は急務であり、SD式英会話は国際人育成の一助になると確信している。

**参考文献**

- Burden, R. L. & Williams, M. (1997) *Psychology for language teachers*. Chapter 3. Cambridge: CUP.
- Burden, R. L. & Williams, M. (1997) *Psychology for language teachers*. Chapter 6. pp123-125. Cambridge: CUP.
- Goldman Sachs, Global Economic Paper No.153 (28th March, 2007) Retrieved from <http://www.chicagobooth.edu/alumni/clubs/pakistan/docs/next11dream-march%20'07-goldmansachs.pdf> on 21st February, 2011
- The partnerships for 21<sup>st</sup> century skills (2004), retrieved on 2<sup>nd</sup> of March 2011 from <http://www.p21.org/>
- Richards, C. J. & Rogers, S. T. (2001), *Approach and Methods in Language Teaching* 2nd ed. (CUP, Cambridge)
- オンライン英会話 hanaso Retrieved on 1st March 2011 from <http://www.hanaso.jp/>
- 山本正実、岩城 沢 「半数が海外勤務敬遠、競争力低下の懸念」、読売新聞 2011年1月17日 記事
- 独立行政法人日本学生支援機構 「平成 20 年度外国人在籍状況調査結果」(2008), Retrieved on 2<sup>nd</sup> January, 2011 from <http://research.go.ne.jp/database/data/000933/>